G・マクドナルドの幻想文学のなりたち

―― 続 ――

相　浦　玲　子

は じ め に

前号では，ジョージ・マクドナルドの Scottish identity の背景として，スコットランドの歴史と宗教について概略的にみてきたが，本篇ではそれらをふまえてマクドナルドの幻想文学がどのようになりたっているかを考察したい。

マクドナルドと Imagination の問題

マクドナルドの文学の根底には，例外なく彼の宗教観が大きく影をおとしている。彼にとって文学が『文学のための文学』というように，文学を目的とみなす芸術至上主義でなかったことは明らかである。しかしまた，かならずしも文学を宗教の手段として位置づけていたわけでもなかった。彼は "imagination" を文字で表現して読者に知らせる役割をする人（＝詩人）について，*Orts* という随筆集の中で "The Imagination" の表題のもとに述べている。彼にとって詩人とは，imagination を創造したり，構築したりする人ではなく，神によって創造された imagination を「探しあてる人」であった。彼は詩人――広い意味で，作家――という存在について次のように述べている，"Is not the *Poet*, the *Maker*, a less suitable name for him than the Trouvère, the Finder?"[1] 彼は，ギリシャ語に由来して "maker"（創造者）の意味をもつ，"poet" という語よりも，ノルマン系の語，"trouvère"（＝trouveur 発見者），つまり現代英語の "finder" の方が，神から与えられる imagination を読者に伝える媒体としての詩人には，ふさわしいのではないかと考えるのである。そこでマクドナルドは，彼自身，媒介者として，さまざまな様相であらわされている真理をかぎわけ，見い出すこの偉大な事業に参加し，それを読者に伝えようとした。彼の幻想文学の特色は，神からのメッセージを伝えるところにある。それは，読者をかえりみず著者の自己満足のためのみに書かれたようなものではなかった。ただ彼は，そのメッセージを読者に直接的にうったえることはせず，読者自身が，幻想世界の中にふみいって，その中で考えるように導こうとした。

マクドナルドは，幻想文学のほかに宗教や思想を直接的に描いた地方小説（local novels あるいは social novels と呼ばれる）を多く書いている。故郷スコットランドを舞台にしたものがほとんどで，多分に自伝的なものが多い。そしてこれらの小説は，当時のスコットランドの社会的・宗教的背景を知るために貴重であり，現在，見直されつつある。特に，厳格で，しばしばゆきすぎたカルヴィニズムの吹きあれた地方の当時の様子が詳しくわかり，歴史的資料として興味深いものである。しかしながら，彼が文学的に評価されているのは，むしろ幻想小説に対してである。これは彼の地方小説が，かなり直接的，具体的に彼の宗教観を表わしているのに対して，幻想小説では読者の側から，より能動的にそこにかくされたメッセージを読みとらなければならないからである。このような小説の作者は，彼自身の論理にしたがうと，"maker"（創造者）ではないし，また厳密には，真理の "finder"（発見者）ともいえない。ここでは作者は，真理の "transmitter"（伝達者），あるいは "guide"（案内人）といったような役割を果たしているのではないだろうか。そのよしあしについては今ふれないとして，彼の幻想小説を読むときは，地方小説を読むときよりも読者が主体的にならなければならないし，またそうならざるをえないようなしくみになっている。もちろんマクドナルドの地方小説では，読者にさまざまな事実が提供され，それをもとに読者が主体的に，自身の考え方を発展させてゆくということは大いにありうることである。

マクドナルドの幻想文学における超自然的存在とシンボルについて

幻想小説は，一般小説にくらべて，登場人物のあり方が異なるといえる。マクドナルドの幻想小説の主人公は，どちらかというと，一般小説の主人公にくらべて，心理的描写が単純である。もちろんこれは，マクドナルドの幻想小説の大半が子供向けと言われていることを考えると当然のことであろう。たしかに大人のための幻想小説，*Phantastes* や *Lilith* の主人公は，*The Golden Key* や *At the Back of the North Wind* といった子供向けと言われる小説の主人公にくらべると，心理描写が多い。しかしこれも相対的にであって，読者が主人公といっしょになって，その立場に自分を置いてゆくような一般小説の主人公のような心理描写ではない。一般小説では，人間性の表層にあるものの内側を描くために，心理的表現を用いるが，マクドナルドの幻想小説の場合には，子供向きのものも含めて，超自然的な存在——たとえば，*The Golden Key* の Grandmother, *At the Back of the North Wind* の North Wind, *Lilith* の Raven など，たいてい一作品に最低ひとりは登場してくる——がつかわれる。そしてきまってこのような超自然的存在は，主人公以外にべつに登場する。

マクドナルドの幻想小説には，そのような存在をささえるかのように，数多くのシンボルがちりばめられている。実際，マクドナルドの用いるシンボルには，ときには上に述べた超自然的存在を含めて，あらゆるものがその対象になりうる。このようにしてつかわれたシンボルは，かならずしも一般的に世間で通用するようなものばかりではない。むしろマクドナルドが，これまでの文化的伝統も一応は心得た上で，さまざまな文化を重ね合わせ，最終的に彼独自のシンボルを創りだしているといえる。これらのシンボルは，登場人物自体であることもある。たとえば，多くの作品に登場する主人公を導く「女性」がある。また，世界中のさまざまな神話によく登場する「水」，「火」，「木」であったりする。たとえば，「水」がつかわれているところでは，「浄化」(purification)，「再生」(regeneration)，そしてときには，「破壊」(destruction) を意味することがある。

ここでは，象徴的につかわれている女性についてみてみたい。これらの女性は，いつも謎めいた存在であり，人格がありながら神であるような，"キリスト的" 存在であることが多い。[2] しかしこの女性たちは，その導かれる対象となる人物の，心の成長度によって，その人物たちへの接し方や導き方が異なる。いくつかの代表的なシンボルとしての女性像を以下で見て，マクドナルドの幻想文学の特徴にふれたい。*The Golden Key* では，Mossy と Tangle という小さな男の子と女の子が主人公であるが，いったんは離ればなれになったこの二人の子供たちを，"Grandmother" と呼ばれる不思議な女性が無事に再会へと導く。しかもこの再会は，単なる再会——別れたときと同じ条件下での再会——ではなく，シンボリックに「死」と「再生」を経験し，成長した姿での再会である。マクドナルドの幻想文学では，主人公が必ず現実世界から旅（あるときは試練の連続）に出発するが，このように，帰結点が出発点と同じところに戻ってくるという設定である。この「初めであり終わりである，終わりであり始まりである」という円運動は，マクドナルドの思想にとって重要であるが，さらに大切なことは，これは円運動といっても，二次元の世界だけではなくて，空間をともなう運動であって，たいていそこに「上昇」がみられるということである。つまり，言いかえると，マクドナルドの描く主人公たちの旅の，あるいは，試練の軌跡は，上昇方向のらせん状をなしているのである。そして "Grandmother" は Mossy にとっても，Tangle にとっても，もともと血縁関係はもちろん，何らかのつながりがある「祖母」という意味での grandmother ではなく，常に大文字ではじまる固有名詞の "Grandmother" なのである。しかも名前に反して，現われるのはいつも若い姿で，主人公たちは，なぜこの若い女性の名が "Grandmother" なのか何度も考えさせられることになる。しかし主人公たちは，"Grandmother" を絶対的に信頼し，このような信頼（faith）なしには，なしえないような試練を乗り越えてゆく。*The Wise Woman* でも同じように超自然的な女性が登場する。この作品の主人公は，二人の女の子である。その内の一人（Rosamond）は，最初，手に負えないような子供であったが，この Wise Woman によって「らせん的上昇」をして人間的に成長し物語の終わりに到達する。これは Wise Woman による教育が，順当な効果をあげたともいえよう。ここで興味深いのは，マクドナルドがそれを単純に，ハッピー・エンディングで終わらせていないというところである。もう一人の女の子（Agnes）は，最初はとても「いい子」であったにもかかわらず，最後に手に負えない人間となっていて，そこで物語が終わってい

る。外見的な物語の終了は，読者の心の中でのストーリーの展開を完全に終わらせてしまうものではない。物語の最後に近いところで，Agnes の母親が途方にくれたとき Wise Woman は言う，"…. When life is no longer endurable, come to me …. But little of home you will find it until you have come to me."[3]つまり，彼女ら—— Agnes や母親——にもまだ，救いの余地は残されている，という希望的な余韻を残して物語が終わっている。現在のままでは彼女らにとって決してやさしい道ではないが，不可能というのではなく，真実に目ざめれば本当の "home" に帰ることができるという暗示である。この作品で Wise Woman は神のような役割をしばしば演じている。「時が来て，目が醒めてはじめて，帰るべきところに帰りつくだろう」という信念のもとに Wise Woman は，彼女らに何かを強制するということはしない。Rosamond に対しては，物理的に力を行使してでも連れ去っていったのに対し，Agnes とその母親に対しては，一見，突き放したようで冷たい態度のように思われる。しかし，これは，心の救済は，人それぞれ，その仕方が異なることを教えている。究極的には，みな「『私』のところへ」帰ってくるのであるが，それには忍耐強く時間を与えなければならないことがあるということを示しているのである。

The Princess and the Goblin と *The Princess and Curdie* においても，great-great-grandmother（ときに grandmother とだけ呼ばれたり，それが大文字であったり，この作品においては，呼び名が定まっていない）と呼ばれる女性が登場する。この超自然的存在の女性は，主人公と血縁のある great-great-grandmother であり，ときに大変，年老いた老婆として，見る者の目に映ることがあるが，またあるときには，大変，若い女性であったりする不思議な存在である。そして，この great-great-grandmother の外観は，彼女を見る者の心理状態によって異なり，魂の純化がすすんでいる者ほど，彼女が若く美しく見え，逆の場合には，非常に年老いて，病弱そうに見えるという関係づけができる。この一連の物語の主人公は，Princess Irene と Curdie であるが，Irene は，幼いにもかかわらず思慮分別があり，それでいて，"childish" ではなく "childlike" である。[4] 彼女より少し年上の少年は，善良で素直な人間であるが，成長の一過程において，身長はのびても心は成長しないという時期があった。このようなときに彼が，Irene の great-great-grandmother を見ると，非常にひ弱で今にも枯れそうな老人であったり，あるいは最初から全く，その存在が見えなかったりするのである。あるとき，Irene は，Curdie と連れだって great-great-grandmother に会いに行こうとする。ところが Irene には見えても，Curdie には great-great-grandmother の姿が見えず，Irene はかえって Curdie に，うそつき呼ばわりされる始末で，心をいためるという場面がある。そこでは，Curdie にとって，目に見えるものが真実なのであり，それ以外のものは虚偽の世界でしかないのである。このことを悲しむ Irene に対して，great-great-grandmother は，*The Wise Woman* の Wise Woman が最後に示したように，Curdie には「時間」が必要であると諭す，

> "You must give him time," said her grandmother; "and you must be content not to be believed for a while. It is very hard to bear; but I have had to bear it, and shall have to bear it many a time yet. I will take care of what Curdie thinks of you in the end. You must let him go now."
>
> . . . . . .
>
> "Curdie is not yet able to believe some things. Seeing is not believing —— it is only seeing…. But in the meantime you must be content, I say, to be misunderstood for a while. We are all very anxious to be understood, and it is very hard not to be. But there is one thing much more necessary."
>
> "What is that, grandmother?"
>
> "To understand other people."[5]

Irene は，言われたとおり，Curdie に自分の言ったことを無理やりに信じさせたりせず，がまん強く時間を与える。一方，しばらくして Curdie は，反省して自分の誤ちに気づくことになる。ともすれば，上からのお説教になりがちなテーマが，純粋な子供の問いに答えるという形で，やさしく，しかし印象深く語られている。この物語にはこのような箇所がいくつかあるが，そのような顕著なバック・ボーンを除けば，最後の最後にいたるまでは，きわめてよくあるハッピー・エンディングの童話のパターンとしてうけとめることができる。ところが，長くてつらい試練のあとやってきたしあわせは，なるほど，Irene と Curdie のもとに

はとどまって，彼らは平和に暮らしたとあるが，このしあわせな王国は，次代にまで継続されない。Curdie の死後，王位についた強欲な王のために国はみだれ，ついに王国は音をたてて壊れ，この地上からあとかたもなく消え去ってしまうというのが，この物語の結末なのである。これを子供向けの童話であると信じて，毎晩毎晩，子供たちに読みきかせ，共にストーリーの展開を追って一喜一憂してきた親たちは，おそらく素直には，この残酷ともいえる結末を受け入れることができないだろう。しかし，これこそが現実の世界であり，現実の世界から出発して，幻想の世界にはいりこんだわれわれは，ふたたび現実の世界へ出てこなければならない定めにある。そして人は，それぞれ，自分自身のらせんを上昇しなければならないのであって，その経路は人によって異なるということを自覚するべきだということでもある。

At the Back of the North Wind では，*The Princess and the Goblin*, *The Princess and Curdie* の Irene のように "childlike" な主人公——ダイアモンドという幼い少年——が登場する。タイトルにも名があるように，North Wind の存在も主人公と同じくらい重要である。これまでみてきた作品やマクドナルドのその他の作品でもそうであるが，「主人公」がだれであるかという問題がこの作品では，最も大きく感じられる。しかしいずれの作品においても，もし「主人公」といわれている人物が登場してこなければ，超自然的な存在は，物語にかかわってこれないという意味で，やはり普通にいう主人公は，生身の人間たちのがわとするべきであろう。これまでとりあつかってきた作品中の超自然的存在の女性は，みな普通名詞を固有名詞化した名前をもっている——Grandmother, Wise Woman, North Wind。マクドナルドは，こうすることによって，いくつかの名前をもち，さまざまな様相を示しながらも何か共通項をもつような神秘的な存在をつくり出している。*At the Back of the North Wind* の中で，Noth Wind と Diamond が名前について語るシーンがいくつかあるが，[6] 「名前」はここでは，「外観」(appearance) の象徴であって，「本質」をかならずしも伝達するものではない，という主張がうかがえる。あるとき North Wind は予め Diamond に何を見ても驚かないように言っておいて，さまざまな動物に変身してみせる。Diamond は，North Wind を心から信じているので，目の前のどう猛な動物を見ても驚かない。*The Golden Key* の "Grandmother" という名が，年齢と関係なく，叡智を象徴しているというのは，これと同じことである。

At the Back of the Norih Wind の結末は，児童向けのストーリーとしては，*The Princess and the Goblin*, *The Princess and Curdie* のストーリーの結末より，さらに悲劇性をおびている。というのは，主人公，Diamond の病気が重くなり，ついには死んでしまうという結末だからである。これも，このようにうわべだけの解釈をすると，悲しいというだけのストーリーのように見えるが，Diamond が，ずっと行きたいと願っていた North Wind の向こうがわの国へ行くことができたのだと考えるなら，Diamond にとっては，ハッピー・エンディングである。このストーリーは終わっても，Diamond にとっては，これからが「再生」への出発だからである。幼い読者にあまり複雑な解釈を要求することは不可能であるが，ここで自分達と関係がないと思っていた死と直面させられ，Diamond の死を悲しみ，それと同時に，Diamond が，ついに待ちこがれていた North Wind の向こうがわへ行ったことに対する安堵を感じれば，満足すべきであろう。しかし，大人の読者であればさらに，この死とは何なのか，North Wind の向こうがわの国とは，何なのかということを考えるように促されるはずである。Diamond は，この現実世界においては，悲しみをさそうあわれな姿となってしまったが，彼の魂は，幻想世界の中にとどまったままでいる。Diamond は，死がどのようなものであるか，知識 (knowledge) としては知らないので，やみくもに恐れたりはしない。文中「私」という名で登場してくる人との対話で，Diamond は North Wind の向こうがわにある国について，次のように語っている，

> ".... Nobody talks there. They only look at each other, and understand everything."
> "Is it cold there?"
> "No."
> "Is it hot?"
> "No."
> "What is it then?"
> "You never think about such things there."
> "What a queer place it must be!"
> "It's a very good place."
> "Do you want to go back again?"
> "No: *I don't think I have left it*; I feel it here, somewhere."
> "Did the people there look pleased?"
> "Yes——quite pleased, only a little sad."

"Then they didn't look glad?"

"They looked as if they were waiting to be gladder some day."[7] 〔Italics Mine〕

この会話からわかるように，"the back of the North Wind" というのは，死の支配する世界である。魂の住む世界であるが，天国でも地獄でもない。ここは暗さと悲しみに満ちた静寂の世界ではなく，やがて来たるべき最後の審判の日を，希望をもって待つところなのである。North Wind は，死の象徴ともいえるが，死神のイメージはもたない。North Wind は，マクドナルドの幻想小説の中でも，ひときわ象徴的で神秘的な存在といえよう。

他の文学作品からの影響

マクドナルドは，これらの超自然的な存在（また，それらの住む幻想世界）を，最初に考え出したわけではない。彼は，英文学史上，幻想文学の開拓者の一人と言えるが，最初，彼の脳裏にあったのは，ドイツ語の märchen にあたるものであった。彼は特に，フランス系ドイツ人である，ド・ラ・モット・フーケ（Friedrich de la Motte Fouqué, 1777—1842）が書いた *Undine* を愛好していた。[8] また，ドイツ・ロマン派の影響を非常に強くうけていることは，*Phantastes* や *Lilith* にたびたびノヴァーリス（Novalis, 1772—1801）や，ホフマン（E・T・A・Hoffmann, 1776—1822）から引用されたり，類似したプロットがつかわれたりしていることを見れば一目瞭然である。このようにマクドナルドは，目に見えるところでは，自国文学よりもドイツ・ロマン派の足跡を歩んだということがいえる。また，ダンテの『神曲』の影響が随所に見られるが，特に *At the Back of the North Wind* には，ダンテが "Durante" という名で登場したり，[9] *Lilith* の中で，主人公が『神曲』と同じように，無垢な女性に導かれて，天上に向かうという構図がある。もちろん，この主題は，ゲーテの『ファウスト』にも共通するものである。

そして，幻想文学という特殊性も手伝って，直接的に現わされてはいないが，重要なのは，多くの英文学の作品の影響である。スペンサー（Edmund Spenser, 1552?—99）の未完の大作，『妖精の女王』（*Faerie Queene*）や，ジョン・バニヤン（John Bunyan, 1628—88）の『天路歴程』（*Pilgrim's Progress*）には，*Phantastes* や *Lilith* の場合と同じような，主人公の成長過程が描かれているのである。もっともこの二作品は，ダンテやゲーテの場合とはおもむきが異なり，寓話的な存在が多分に登場してくるというところが，マクドナルドの作品に受け継がれているといえる。また彼の作品には，彼の時代と接近した，ワーズワス（William Wordsworth, 1770—1850）の自然観[10]や宗教的救済への展望[11]などが特にみられる。

このような後天的に取得した文化的要素を多く含みもちながら，マクドナルドにとって，根元的に存在しているのは，彼の Scottish identity であり，ケルトとしての自覚であった。これも彼の幻想文学の中では，直接的に現われにくいのであるが，たとえば，短篇の "Papa's Story" では，決してスコットランドの言葉をつかわないという約束をさせられて子供たちに〝お話〟をせがまれた父親が，ある話をし始める。父親は，スコットランド出身であるが，今や子供たちは，イングランドで生活しているのであろう。マクドナルド自身の姿がここでは重ね合わさって浮かびあがっている。さて年少の子供は，父親がスコットランドの言葉を使うことを変に思うが，少し物のわかってきた年長の子供は，父親がいかにスコットランドを愛しているかを感じとり，自分自身，スコットランドに興味をもち始めている。父親は，最初，注意深く言葉を選んで話すが，ついに，話しに熱中して最後のところで，スコティッシュの言葉を使ってしまうというストーリーである。そしてこのストーリーの中に出てくるストーリーもスコットランドを舞台にしたものである。あるいは，"The Carasoyn" という短篇の中では，舞台にスコットランドが登場してくるし，*The Gray Wolf* では終始，スコットランドの荒涼とした海辺が舞台になっている。*At the Back of the North Wind* で，Diamond がうたうたくさんの詩は，マクドナルドが生まれ育ったスコットランド東北部のバラッド（ballads）の影響を考えさせずにはおかない。この地方は，古くからバラッドの宝庫であり，それらがこの地方のさまざまな場所で歌いつがれてきたはずだからである。[12]

む す び

これらマクドナルドの幻想文学の中で，表面上はわからないが，どの作品にも共通する重要な主題がひとつあるが，それは「故郷」という問題である。これまで述べてきたように，マクドナルドの作品中の主人公は，たいていの場合，現実世界を起点として幻想の世

界の中に足をふみいれ，成長して現実の世界の中にもどってくるというパターンをとる。これは彼自身の生涯の足跡に照らしても，生まれ育ったスコットランドの地から，イングランドへ移り住み，そしてそこからさまざまな事情で，帰ってゆくことのできない故郷を，あこがれつつながめていたマクドナルドの姿と重なる。そして大きくは，アダムとイヴの原罪によって楽園を追放された人類が，その心のふるさとを求めてさまよっている姿とも重なる。故郷を失なっただれしもが，"home" へ帰りたいと願うが，地理的，即ち，外見上の "home" にはたどりつけても，それがかならずしも "home"でないことがあり，"home" は人の心に宿っているものであることを知るようになる。マクドナルドは全人類にひらかれた "home" は，最初に人類がいたという神のもとへ帰ってゆくことによって得られると考えるのである。

マクドナルドにとって，外観というものは問題にならなかった。うわべがどのように見えるかということは重要ではなかった。"The Carasoyn" には，盲目の老婆が登場するが皮肉にも彼女は，目が見える人よりもよく心の目（mind's eye）で見ることができるのである。主人公の Colin がこの老婆に会う場面は印象的である。

> Then Colin saw that she had no eyes.
>
> "I am very sorry you are blind," he〔= Colin〕said.
>
> "Never you mind that, my dear. I see more than you do for all my blindness. Tell me what you want, and I shall *see* at least what I can do for you."[13]
>
> 〔Italics Mine〕

そしてこの老婆は，Colin を窮地から救い出す役割をする。マクドナルドの幻想文学では，この一例のように，不可能なはずのことがおこりうるのである。さまざまなシンボルは，幻想世界において，現実世界での価値感を転倒させたり，[14] 現実世界では及びもつかない別の性格をもって，生き生きとよみがえったりして幻想文学ならしめている。このようにして価値の転倒を文学の世界に導入したのは，マクドナルドがはじめてではなかったが，彼の作品は，われわれが，ときには幻想世界の中に足をふみいれたように，外観に束縛されることなく，価値感を転倒させてみる必要があることを教えてくれているのである。

注

1) George MacDonald, *Orts* (London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, 1882), **20.**
2) いくつかの作品の中には，超自然的存在で，しかも邪悪な女性（たとえば *Lilith* のLilith や *The Gray Wolf* の若い女性）もある。
3) *The Wise Woman and Other Fantasy Stories* (Herts: Lion Publishing, 1980), **107.**
4) マクドナルドは，"childish" と "childlike" を厳格に区別して用いる。大人であっても childish（子供っぽい）な人間は存在するし，また逆に，大人であっても childlike（純粋な心を失なわない人）がいるというのである。"I do not write ... for children, but for the childlike, whether of five, or fifty, or seventy-five." (*The Golden Key and Other Fantasy Stories* 〔Herts: Lion Publishing, 1980〕, **x.**)
5) *The Princess and the Goblin* (1872; rpt. Harmondsworth: Puffin Books, Penguin Books Ltd., 1981), **155—156**, and **159.**
6) *At the Back of the North Wind* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1973), **101—103**, and **313.**
7) *Ibid.*, **96—97.**
8) *A Dish of Orts* (London: Sampson Low Marston & Company Limited, 1895), **313**の中で「童話とは何かと問われたら，『ウンディーネ』をお読みなさいとすすめるでしょう」というほど，この作品を美しく，すぐれた作品とみなしていた。
9) *At the Back of the North Wind*, **95.**
10) Cf. *Wordsworth & Coleridge: Lyrical Ballads* (London: Methuen and Co. Ltd., 1963). "The Tables Turned," などの詩に見られる自然観。
11) "Peter Bell" にみられる魂の救済。
12) 特に，"Tam Lin" と呼ばれるスコットランドの伝統的なバラッドのひとつなどに，その影響が考えられよう。*A Scottish Ballad Book*, ed, by David Buchan (London: Routledge Kegan Paul, 1973).
13) *The Light Princess and Other Fantasy Stories* (Herts: Lion Publishing, 1980), **90.**
14) これは，マクドナルドが大きな影響を与えたといわれるルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』にも，しばしば見られるものである。